

ねぎの被害が増加する 病害虫について

近年、ねぎ栽培において新たな害虫の発生や、連作等による被害が増加しています。特に難防除病害虫と呼ばれる種類は、対策を怠ると大幅なねぎの生育遅延や収量低下を招く恐れがあります。薬剤による適期防除やこまめな雑草管理などの対策を行っていくことが重要です。

1 ネギネクロバネキノコバエ

(1) 害虫の特徴

幼虫は、白い体色に黒色の頭部を持ち、成虫は、黒い小さな蚊のようなハエです。3月中旬〜12月上旬まで長く活動し、特に9月〜10月に増加します。ねぎ栽培後も、雑草や収穫残さに寄生して生き残ります。



集団で加害するネギネクロバネキノコバエの幼虫

(2) 被害の特徴

幼虫が地中でねぎの茎盤部や軟白部を食害します。排水不良地を好み、集団で加害するため、激発するとほ場が坪枯れとなります。

2 ネギハモグリバエ B系統

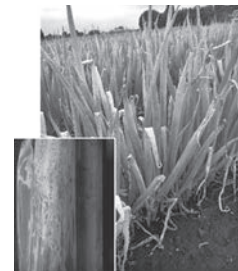
(1) 害虫の特徴

体長約2mmの小さなハエで、葉

の組織内で産まれた幼虫が葉肉を食害します。気温が高くなる梅雨明け以降から急増します。

(2) 被害の特徴

B系統は、従来よりも一葉あたりの幼虫数が多く、被害が進むと葉肉が食い尽くされ、葉全体が白化したようになり



B系統の食害痕

3 黒腐菌核病

(1) 病気の特徴

病原菌は、低温を好み、発育適温は15〜20℃、激しく蔓延するのは10℃前後です。また、排水不良やpHが低いほ場でも発生リスクが高くなります。菌核が土壌に残ると、長年にわたる伝染源となります。

(2) 被害の特徴

地下部は、黒く腐敗し、ゴマ粒大の黒色の菌核が形成され、生育不良や外葉の黄化が起こり、葉鞘部に白いかびを生じます。



黒腐菌核病発病株の症

排水対策を徹底して根痛みを防ぐとともに、茎盤部(根元)まで

しっかりと薬剤散布をすることが重要です。また、休耕畑は、土壌消毒等を行って病原菌密度を下げるのが効果的です。

4 薬剤による防除

(1) ネギネクロバネキノコバエ・ネギハモグリバエ

発生初期に防除を徹底することが重要になります。害虫頭数が多い9月〜10月は、両方の害虫に登録のある薬剤を使い、10日〜14日間隔でローテーション散布しましょう。ネギネクロバネキノコバエは、農薬が地中に届きやすい土寄せ前までの防除が効果的です。展着剤を活用し、株元灌注の薬剤で、茎盤部までしっかりと届くように処理しましょう。

(2) 黒腐菌核病

病原菌の生育温度に合わせて、体系防除を行います。地下部の被害を防ぐためには、茎盤部まで薬液を届けることが重要です。農薬の使用基準に示された薬液量で、適期に処理をしましょう。
1回目…9月下旬〜10月上旬(平均気温が20℃を下回る時期)
2回目…1回目の消毒後1〜1か月半後
防除方法や薬剤に関するご質問などございましたら、当センターまでご連絡ください!

表 難防除病害虫の農薬例 (令和3年8月1日現在)

作用機分類 (IRAC/FRACコード)	薬剤名	希釈倍率散布量	使用方法	本剤の使用回数	適用病害虫		
					ネギハモグリバエ類	ネギネクロバネ	黒腐菌核病
I: 4A	スタークル顆粒水溶剤	1,000倍 1L/m ²	株元灌注	1回	○		
	アルバリン顆粒水溶剤	400倍 0.4L/m ²				○※1	
	ベストガード水溶剤	1,000〜2,000倍 100〜300L/10a	散布	3回以内	○	○	
I: 15	カスケード乳剤	4,000倍 100〜300L/10a	散布	3回以内	○	○	
I: 30	グレーシア乳剤	2,000〜3,000倍 100〜300L/10a	散布	2回以内	○	○※1	
F: 7 (C2)	バレード20フロアブル	2,000倍 100〜300L/10a	散布	3回以内※2			○
	アフエットフロアブル	1,000〜2,000倍 1L/m ²	株元灌注	2回以内			○
	カナメフロアブル	4,000倍 100〜300L/10a	株元散布	4回以内			○
F: 12 (E2)	セイビアフロアブル20	1,000倍 100〜300L/10a	散布	3回以内			○

※1 ハモグリバエ類で登録
 ※2 育苗期後半〜定植当日に灌注で使用した場合は残り2回
 ● 農薬を使用する際は、必ず使用農薬のラベルを確認してください。
 ● 同じ作用機分類 (fracコード) の薬剤は連用せず、系統の異なる薬剤とローテーションして、害虫の薬剤抵抗性や耐性菌を増やさないようにしましょう。